1月１１日（日）サムエル記第一１６章１～５節
「いつまであなたはサウルのことで悲しんでいるのか。わたしは彼をイスラエルの王位から退けている。角に油を満たせ。さあ、わたしはあなたをベツレヘム人エッサイのところに遣わす。彼の息子たちの中に、わたしのために王を見出したから。」（１節）

「いつまであなたはサウルのことで悲しんでいるのか」とサムエルに言われた主は、サウルを王位から退けることをみこころとされ、次の王となるべき人物に油注ぎをするためにサムエルを遣わされました。サウルのことで悲しむサムエルの姿の中にサウルに対する深い思いがあったと想像できますし、実際に私たちも、何か悲しいことが起こると絶望したり、心に気力がわかないということがよくあります。しかし、主はあえて私たちに新しい使命を与えることで、そのような状態から私たちを立ち上がらせようとしてくださることもあり、悲しみの中で深い慰めを得たり、悲しみを癒されることで、悲しみから立ち上がらせられることもあります。そこに現れる主の私たちに対するあわれみに感謝しましょう。それとともに、主は常にご自分のみこころによる働きのためにご自分のみこころにかなう人物を求めておられます。もし主が自分を主の働きのために召しておられるとの確信があれば、主の召しに応答する者でありたいと思わされます。

サムエルが行くように命じられたのは、ベツレヘム人エッサイのところでした。エッサイはユダ族で、ペレツの子孫で、ルツの孫にあたります。２節でサムエルは、新しい王に対する油注ぎのためにベツレヘムに行ったとサウルが聞くと、謀反を企てたと思われて、自分は殺されるのではないかと心配します。そのようなサムエルに主はいけにえをささげるために来ましたと言うようにと知恵を授けます。主はご自分の働きに召した者の思い煩いを不信仰とするのではなく、むしろ思い煩いや恐れを取り除きながら私たちを遣わされます。そのようにして私たちを遣わされる主は、常に私たちに配慮してくださるお方なのです。

1月１２日（月）サムエル記第一１６章６～１３節
「さあ、彼に油を注げ。この者がその人だ。」（１２節）

目的を達するために「サムエルはエッサイと彼の息子たちを聖別し、彼らを祝宴に招」きました。（５節）サムエルは長男エリアブを見て、「きっと主の前にいるこの者が、主に油を注がれる者だ」と思いました。（６節）しかし、サムエルは長男の容貌や背の高さを見てはならないと主から言われます。そこが主の召しの基準ではないからです。人が見るようには見ないと言われ、主の見方と人の見方が異なることを明らかにし、特に人はうわべを見るが、主は人が決して見ることのできない心を見ると言われます。

その後アビナダブ、シャンマ、そして七人の息子をエッサイはサムエルの前に進ませましたが、「この者も主は選んでおられない。」とサムエルはエッサイに言い、「子どもたちはこれで全部ですか。」と尋ねるサムエルに対し、エッサイは「まだ末の子が残っています。今、羊の番をしています。」と答えました。末の子というのは、最も小さな者ということですが、エッサイの判断で、羊の番をしているし、末の子は呼ぶ必要はないと考えたのでしょう。私たちは、自分でしばしば判断をしてしまうことがあり、それが主のみこころと異なることがあります、ですか

ら、私たちはどんな小さなことであっても、まずは主のみこころを尋ね、主のみこころはどこにあり、主は何を願っておられるのかを祈り求めなければなりません。

サムエルは、エッサイに人を遣わしてダビデを連れて来るように命じます。その連れて来られたダビデは、血色が良く、目が美しく、姿も立派でした。そして、主は「さあ、彼に油を注げ。この者がその人だ。」と言いました。ダビデの油注ぎに私たちは「人が見るようには見ないからだ。人はうわべを見るが、主は心を見る」（７節）と言われた主の選びが、人の選びとは大きく異なることを知らされます。それとともに、自分の考えや思惑や願いではなく、主のみこころだけがなり、主のみこころがなされる時に、そこに必ず主の最善がなされ、祝福が与えられることを信じて、主のみこころを祈り求めてまいりたいと思わされます。

１月１３日（火）サムエル記第一１６章１４～２３節

「ご覧ください。ベツレヘム人エッサイの息子を見たことがあります。弦を上手に奏でることができ、勇士であり、戦士の出です。物事の判断ができ、体格も良い人です。主が彼とともにおられます。（１８節）

「主の霊がその日以来、ダビデの上に激しく下った。」（１３節）とありますが、それは結局「主の霊はサウルを離れ去った」ことを意味しています。それとともに、「主からの、わざわいの霊が彼をおびえさせた。」とあります。ここで多くの人によって、主から与えられる霊には良いものがあったり、悪いものがあったりするのかと議論がなされています。その結論として、サウルに対して神がダビデを王宮に竪琴を奏でる者として送るというご自分の計画をなされるために、わざわいの霊を送られたと言えるでしょう。ですから、主がサウルに対してわざわいの霊を送られたというのは、特別な事例であって、常に神がそのようにされるということはないということです。しかし、このことをサウルに対する神からの懲罰とまで言えるかどうかまでは分かりませんし、何か自分にとって良くないことがあれば、それらをすべて神から来た刑罰だとまでは言えないでしょう。実際に、この後サウルの家来からの提案で上手に竪琴を弾く者としてダビデがサウルに仕えることとなりました。特に、サウルがダビデを気に入ったことや（２２節）ダビデが竪琴を手に取って弾くと、サウルは元気を回復し、わざわいの霊がサウルから離れ去ったことも、すべて主のみこころによるご計画であったと言えます。このようにして、主はすべてをご自身のみこころの通りに進められ、主の栄光が現れるようにしてくださるのです。

１８節にダビデの紹介がなされていて、「弦を上手に奏でることができ、勇士であり、戦士の出です。物事の判断もでき、体格も良い人です。」とあり、最後に「主が彼とともにおられます。」と言われています。ここに主の霊の離れ去ったサウルと、主の霊が激しく下り、主が彼とともにおられたダビデとの対比がなされているように思えます。私たちも御霊に満たされ、主がともにおられると周りが見てくれるような歩みをしてまいりたいと願います。

１月１４日（水）サムエル記第一１７章１～１１節

「サウルと全イスラエルは、ペリシテ人のことばを聞き、気をくじかれて非常に恐れた。」（１１節）

ペリシテ人は軍隊を招集し、ソコとアゼカの間にあるエフェス・ダミムに陣を敷きました。一方、それに対抗するためにサウルとイスラエル人は対峙するかたちでエラの谷に陣を敷きペリシテ人に対する戦いの備えをしました。そうしますと。ペリシテ人の陣営から一人の代表戦士が出てまいりました。これは、全面戦争をすることなく一騎打ちで決着をつけようとの意図のもとなされたことです。ペリシテ人の代表戦士は、ガテ生まれのゴリヤテで、背の高さは六キュビト半（＝約２.８m）かぶとは青銅で、鱗綴じのよろいを着けていました。胸当ての重さは青銅で五千シェケル（＝約５７kg）足には青銅のすね当てを着け、背には接近戦で用いる青銅の投げ槍を負っていました。その槍の穂先は六百シェケル（＝約６.８kg）ありました。そのゴリヤテの前には盾持ちが歩き、実に威圧的な姿でした。そしてゴリヤテは、一対一で勝敗をつけ、負けたほうが勝ったほうの奴隷となるとの条件を提示します。そして、ゴリヤテは「今日、この日、おれがイスラエルの陣を愚弄してやる」と言います。実際に、イスラエル人を「サウルの奴隷ども」（８節）と呼び、自分が負けるはずがないという自信と高ぶりが、イスラエルの陣への愚弄となりました。そして、ゴリヤテの自信は、自分の体格の良さや持っている力、装備などから出ていると思われますが、人間には完璧ということはありません。それにもかかわらず、多くの人々は、自らや自分の持てる財産、社会的な地位や名誉を誇り、周りを愚弄するようなことまでしています。それらの方々も主を知り、謙遜になることができるように祈りましょう。そして、サウルと全イスラエルは、ペリシテ人のことばを聞き、気をくじかれて非常に恐れました。なぜかと言いますと、誰もゴリヤテには勝てないと思ったからであり、ゴリヤテに負けた後のペリシテでの奴隷生活を考えたからです。私たちは、始めから無理だ、できないと考えることがあります。また現実になっていない将来のことをあれこれと考えて思い煩うことがあります。むしろ、私たちはみこころと信じたなら全能の主を信じて、前進させていただきたいと思いますし、将来のことを思い煩って悩むよりも、主の導きを信じて、平安のうちに日々歩ませていただきたいと思わされます。

１月１５日（木）サムエル記第一１７章１２～２３節

「ダビデが彼らと話していると、なんと、そのとき、あの代表戦士が、ペリシテ人の陣地から上って来た。ガテ出身のゴリヤテという名のペリシテ人であった。彼は前と同じことを語った。ダビデはこれを聞いた。」（２３節）

１２節には。ペリシテとの戦いの場にダビデを登場させるにあたって、簡単な状況説明がなされています。ダビデの父エッサイは、年を取っていたので、兵役は免除されていたのでしょう。その代わりに長男エリアブ、次男アビナダブ、三男シャンマが、戦いに出ていました。15節でダビデは、「サウルのところへ行ったり、帰ったりしていた。」とありますが、「ベツレヘムの父の羊を世話するためであった。」とありますので、サウルのところへ行くよりも、羊の世話のほうがダビデにとっては大切な働きであったという印象を受けます。そして１６節を見ますと、４０日間ペリシテ人とイスラエル人は対峙していて、同じようには８～１０節にあるようなことを叫び続けたのでしょう。そして、戦いが長引くにつれ食料確保の問題が出てまいりますが、エッサイは、ダビデに戦闘の場へ行き、食料を届けることと兄たちの安否を確認するこ

とを命じました。そして、イスラエルの陣地へ行ったことで、ダビデはゴリヤテが８～１０節にあるようなことを叫んでいるのを聞きました。エッサイが特別にダビデを使いに出したのは、恐らくサウルからダビデを仕えさせるように命じられていたからだろうとは思いますが、それにしても、もし仮にダビデが、イスラエル人の陣地に来ることがなければ、ゴリヤテがイスラエルの陣営に向かって叫んでいたことばを聞くこともなかったでしょうし、ゴリヤテと対決することもなかったはずです。私たちの人生には偶然ということは決してありません。主は、私たち一人一人に対してみこころによるご計画を持っておられ、それを成し遂げるために私たちを導かれ、私たちの人生を導かれます。私たちの人生において決定的な瞬間があったはずです。そこに主の導きがあったのです。そして、これから一人一人の人生を主が導かれる中で、決定的な瞬間が訪れるかもしれませんが、そこにも主の導きと計画があるのです。

１月１６日（金）サムエル記第一１７章２４～２６節
「このペリシテ人を討ち取って、イスラエルの恥辱を取り除く者には、どうされるのですか。この無割礼のペリシテ人は何なのですか。生ける神の陣をそしるとは。」（２６節）

２４節に「この男を見たとき、彼の前から逃げ、非常に恐れた。」とありますが、ゴリヤテの前から逃げたという表現からもいかにイスラエルの兵士たちがゴリヤテを恐れていたか分かります。しかし、ダビデはゴリヤテのイスラエルをそしる言葉を聞いた時に、「このペリシテ人を討ち取って、イスラエルの恥辱を取り除く者」と言い、ゴリヤテを恐れることなく「この無割礼のペリシテ人は何なのですか。生ける神の陣をそしるとは」と言ったのです。

イスラエルの兵士たちも、ダビデも同じゴリヤテを見て、彼の発する同じ言葉を聞きました。しかし、ひどくゴリヤテを恐れる兵士たちと、全くゴリヤテを恐れないダビデの対照的な姿を私たちは見ることができます。その違いは、信仰をもって見るか、見ないかの違いだけです。ダビデは、信仰をもってゴリヤテを見ていたので、彼を「無割礼のペリシテ人」と呼び、イスラエルの陣営を生ける神の陣と呼んだのです。つまり、ダビデは自分たちは割礼を受けて、神の民とされているので、主が必ず守ってくださるとの信仰があり、自分たちの信じている神は、無割礼のペリシテ人たちが信じている、木や石やさまざまな材料で造られた偶像のようなものではないこと、また、命がなく、動くことも話すこともできない神のようなものではなく、生けるまことの神だと信じていたのです。私たちの人生にも、日々様々なことが起こります。逃げ出したくなるほど、ひどく恐れることはありませんか。私たちは信仰をもって見ることで、恐れなく日々歩みたいと思わされます。また個人的にだけではなく、教会にもさまざまなことが起こります。その時にも、ともに信仰によって心を一つにして、恐れることなくさまざまな問題にともに向かってまいりましょう。私たちは神の民であり、私たちの信じる神は、目には見えませんが、生ける神なのですから。

１月１７日（土）サムエル記第一１７章２７～３０節
「私が今、何をしたというのですか。一言、話しただけではありませんか。」（２９節）

２８節でエリアブは、なぜ弟のダビデに怒りを燃やしたのでしょうか。津村師は、その注解

書の中で、決してねたみということではなく、非常に緊迫した状況であるにもかかわらず、ダビデの行動や言葉が受け入れられなかったのではないかと説明します。恐らく戦いにも出ていないダビデが、「このペリシテ人を討ち取って、イスラエルの恥辱を取り除く者には、どうされるのですか。」と尋ねてみたり、「この無割礼のペリシテ人は何なのですか。生ける神の陣をそしるとは。」と、大きいことを言っているように思えたのかもしれませんし、イスラエルの人々はみな、ゴリヤテを見たときに、彼の前から逃げ、非常に恐れましたが、その中には長男エリアブもいたはずです。ですから、そのような姿をダビデに見られたことによる恥ずかしさもあったことでしょう。それと同時に、サムエルから油注がれたのは、長男のエリアブではなく、末の弟のダビデでした。また、サウルに「ダビデを私に仕えさせなさい。気に入ったから。」（１６章２２節）と言われています。このことが、エリアブにとって決して気分の良いものではなかったでしょう。

クリスチャンであっても、人との関係で心が揺さぶられることが多くあります。それは牧師でも同じです。自分より年の若い牧師が用いられるのを見ますと、おもしろくない気持ちになり、いつも自分の罪深さを思い知らされ、悔い改めさせられます。ここでは、エリアブは弟のダビデから教えられることがあったはずです。例えば、なぜダビデは２６節のように言えるのだろうかと考える中で、それがダビデの信仰から出ているのであれば、その信仰にならうこともできたはずです。私たちも若い人から教えられることは多くあり、そのようにして私たちはますます謙遜にされていくのです。人を見て、ただ受け入れられないからと怒りを燃やすのではなく、謙遜に一人一人を向き合う中で、主から教えられることも多くあるはずです。私たちも、根拠のない怒りを人に向けることはないでしょうか。それは、傲慢やねたみなど私たちの罪から出ていることはないでしょうか。